

百ます問題について：「基本編」「組み合わせ編」共用 その2

百ます問題の構成

百ます問題には「基本編」と「組み合わせ編」があります。「基本編」「組み合わせ編」解答解説を含めてそれぞれ全50ページです。

「基本編」

学習指導要領（教科書の内容と思ってよい）にある**基本のみを使った問題で構成してあります**。
特によく使うものは、表現を変えて繰り返してあります。各20問×5回分100問でその範囲の知識・技能をカバーしています。

3年生までの100問	1～3年の範囲	標準時間は1枚、3～5分
4年生の100問	4年の範囲	標準時間は1枚、5～8分
5年生前半の100問	5年生前半の範囲	標準時間は1枚、7～12分 (*2)
5年生後半の100問	5年生前半の範囲	標準時間は1枚、7～12分 (*2)
6年生前半の100問	6年2学期までの範囲	標準時間は1枚、7～12分 (*3)

「組み合わせ編」

基本知識や技能を2つ以上組み合わせで作られた問題です。もちろん「基本編」の知識・技能が必要ですが、それらのどの知識を使って、どの順に組み合わせしていく能力が新たに必要となります。

「組み合わせ編」の対象学年は「基本編」と同じですが、1枚10問×5回分で構成してあります。

3年生までの50問	1～3年の範囲	標準時間は1枚、7～12分
4年生の50問	4年の範囲	標準時間は1枚、7～12分
5年生の50問	5年の範囲	標準時間は1枚、10～15分
6年生前半の50問	6年生前半の範囲	標準時間は1枚、10～15分
6年生後半基本の100問(20問×5)		標準時間は1枚、5～8分

百ます問題の対象学年

百ます問題の対象学年は、3年生後半からの小学高学年までと、中学生で数学が苦手な生徒です。

例：5年生後半ならば、3年生までの問題から5年生までの全ての問題をします。

「基本編」の対象学年

3年生までの100問	3年後半から4、5、6年、中学生
4年生の100問	4年後半から4、5、6年、中学生
5年生前半の100問	5年前半終了から、6年、中学生
5年生後半の100問	5年後半、6年、中学生
6年生前半の100問	6年前半終了から、中学生

「組み合わせ編」の対象学年

3年生までの50問	3年後半から4、5、6年、中学生
4年生までの50問	4年後半から5、6年、中学生
5年生までの50問	5年後半、6年、中学生
6年生までの50問	6年前半終了から、中学生
6年生後半基本の100問	6年2学期後半から、中学生

(*1)バブル経済がはじけ、不況からいつ立ち直るだろうとみんなが思っていたとき、私はまだ高校教諭だった。そのころ兵庫教育大学（先生が行く大学）の先生の講演を聴く機会があった。

そのときの資料はなくなったが、一つだけ記憶に残っていることがある。それは「中学校で先生の授業を理解できて家で自習ができる生徒は20%、学校で分かったつもりになっていたが、家では何を勉強したのかよく分からない生徒が60%、残りの20%が学校でも、家でも分かっていない」という内容の講演であった。

当時生徒が授業内容を分かっている割合が、7・5・3といわれていたから、感覚として納得できるものであった。（7・5・3とは、授業の内容が分かっているのが小学校で7割、中学校で5割、高等学校で3割といわれていた）

(*2)教科書によっては5年生後半に入るものもあります。

(*3)6年生3学期の基本は組み合わせ編にあります。この範囲は中学1年の1、2学期に文字式などと組み合わせで使います。